自然と旅の現象学への序論

Introduction to the Phenomenology of Wilderness and Journey

河野哲也
KONO, Tetsuya

キーワード　現象学，意味，自然，旅

1. 意味，目的，価値の問い

意味，目的，価値。私たちは，これらのものを自分の人生のなかで見いだそうとする。

自分が生きている意味とは何か。
人生の目的とは何か。
この仕事や勉強にどんな価値があるのか。

こうした問いは，誰もが一度は生きている中で自問したことがあるだろう。私たちは，価値のある人生を送りたい，大きな目的のある仕事がしたい，意味のあることを成し遂げたいという願望をもっている。そして，それらのものを見つけようとしてさまざまに試み，努力し，ときに挫折する。

意味，目的，価値は，それぞれ概念として異なった意味合いをもっている。しかし，どこかでつながりあってもいる。まず，それらには方向性という意味が含まれているだろう。意味も，目的も，価値も，あるものを選び，ほかのものを選ばないという選別を行うことでもある。目的をもつとはどこかを到達点として選び，そこに向かうことである。価値があるとは，他の物と比べて何かを優れたものとして評価し，それらの間に上下をつけられることである。言葉に意味があるとは，たとえば，「本日は休日です」のように，ある音やインクの形状が現実の何事かを指し示すことである。あるいは，たとえば，「火事だ，逃げろ」といった場合のように，音声が誰かに何

かをするように指示したり，指令したりすることである。意味も目的も価値も，どこかに頭を向けてどこかに背中を向けること，どちらかを向いてどちらかを向かないということである。それは私たちの身体の構造とその振る舞いに基礎を置いているのかもしれない

動物も同じように，方向性をもった行動をとる。しかし，人間の特徴は，これらの方向性を大きなひとまとまりへと統合しようとする傾向にある。つまり，いまこの場だけを生きる意味ではなく，自分の人生全体の意味とは何かを問題にする。小さな好奇心についてではなく，学問や科学の全体の価値はどこにあるのかと問いをたてる。私たちは，大きなまとまりとしての方向性を考えようとする。

意味，目的，価値という概念にはもうひとつ特徴がある。それは，それらの概念が，ある事柄を終局点から位置づけようとすることである。「この勉強をする意味はどこにあるのか」という中学生の問いは，自分が到達すべき地点にこの勉強がどのように結びついているのかを尋ねている。「この作業の目的は何ですか」と問う労働者は，最終的な生産物を作り出す工程のなかでいまの作業がどこに位置するのかを聞いている。

意味，目的，価値は，こうして，最終到達点に至る道程を指し示す概念である。それらは，全体性を一定の方向性へと絞り込もうとする意図をもった言葉だ。

2. 意味の学としての現象学

こうして，私たちはただ単に生きることに満足することができない。人間はただ存在していることができない。私たち人間は，意味，目的，価値と呼ばれる最終到達点に至る道を歩んでいこうとする。個々にこそ，人間性の尊さがあるという人たちもいる。私は，この人間の傾向に対して疑義を立てることからはじめたい。（本論では，意味，目的，価値を総括して「意味」と呼ぶことがある。目的や価値の概念をも含意する，一番，広範な概念に思われるからである。）意味に対立するのは無意味である。無意味とは，どこにも向かうことがなく，何とも結びつくことなく，ただ存在することである。

私たちは，この無意味性をしばしば自然に見いだす。ダーウィンの進化論は，まさに無意味の問題を私たちに突きつけてくる理論であり，思想であった。ダーウィニズムにおける進化とは，価値の向上としての進歩を意味するのではない。進化とは，生物個体群の性質が，ある特定の場所に適応する過程のなかで，世代を経るにつれて変化する現象を指す。それは，突然変異によって生まれた諸個体が，環境によりよく適応すること以上のことではなく，そこには何らの価値の前進が含まれていない。人間の身体も進化の産物であり，その祖先の生き物たちと比較して，何かの価値の向上が生じているわけではない。

しかし，私たちは人間において何かが向上しており，進歩があると考えている。そして，そうした進歩は，意味，目的，価値といった概念によって表現され，私たちは，自分の人生をそれを求める過程のように捉えている。とすれば，意味，目的，価値は，生物界の進化とは切り離された人間の領域だけに存在するものだということになるだろうか。そして，それらの概念がもっている「最終到達点に至る方向性」は自然から与えられたものではなくて，人間同士の関係の中で，社会や文化と呼ばれているものの中で作り出されてきたものだと考えていいだろうか。そう考えてよいように思われる。

そこで，私に思い浮かんでくる問いは，次のようなものだ。第一に，意味（目的，価値）は，誰がどのようにして決めるのかという問題だ。もちろん，そこには「何についての意味（目的・価値）なのか」という問いが先行する。たとえば，私の人生の意味は，誰がどうして決めるのかとか，社会の存在する目的は何であり，誰がどうして決めているのかという問いが思い浮かぶだろう。だが，もうひとつ重要な問いは，なぜ私たちは，意味や目的や価値を求めるようになったのかという問いである。別の表現を使えば，なぜ私たちは自分の人生を向上させ，進歩させようとするのかという問いである。この問いは，なぜ私たちは権力欲をもつのか，言い換えれば，なぜ私たちは向上心をもつのかというのと同じ問いなのかもしれない。

「現象学（phenomenology）」という哲学運動は，前者の問い，すなわち，意味とは誰がどのように与えているのかという問いに答えようとしたものだ。現象学は，ドイツの哲学者，エトムント・フッサールが創始した哲学的な方法論である。それは，一言で定義してしまえば，当人が経験している意味に満ちた世界を経験しているそのままに記述しようとする方法のことである。

フッサールが，当人の観点から経験の記述をする方法を考案しようと思い立ったのは，一九世紀末に，自然科学的方法論が人文社会科学に応用され始めたからである。この時代では，生理学的や神経科学的な方法によって，人間の心を自然科学的で客観的な方法で理解しようとする試みが生まれ，心理学や精神医学などに導入されるようになった。自然科学は，世界のさまざまな出来事を線形に分解し，特定の出来事を他の出来事から抽象して，その変化を数学的，量的，あるいは統計的に捉え，法則化しようとする。そして，その抽象的な法則によって，今度は私たちの日常的な世界の変化を理解しようとする。

たとえば生理学では，音は空気の振動として測定される。音は，空気振動とそれによって生理学的に引き起こされる神経興奮の量的差異に還元される。そうした研究方法では，私たちにとって重要な音の意味が見失われる。それぞれの音のもつ，それぞれの人にとっての意味，たとえば，安らぎをもたらす音，大きな希望をもたらす音，嫌悪や恐怖をもたらす音などの音のもつ意味は，音の振動数では測定できない。ある音が，それぞれの個人にもたらす意味は異なるはずであるのに，あるいは，音が聞こえてくる文脈や状況によって異なった意味をもって聞こえるはずなのに，科学はその個体差や文脈状況の差異を捨象してしまう。自然科学は，世界がもっているはずの意味を主観的・個人的な幻想として退ける。こうして，私たちが日常的に自分の身体を通して生きている世界（この世界を現象学では「生活世界」と呼ぶ）から「意味」は剥奪される。

自然科学的に捉えられた世界に欠けているのは，フッサールによれば「意味」である。しかしながら，人文科学は自然科学に対抗するための方法論や理論をもちえずにいて，学問の対象から一切の意味が取り除かれてしまう人文科学の危機，そして，世界から一切の意味が取り除かれてしまう世界観の危機に直面している。フッサールはこのように考えた。

では，どのようにすれば，あるいは，どのような方法を採れば，私たちが日常的に暮らしている世界を，意味に満ちたものとして捉えることができるのだろうか。フッサールによれば，私たちが生きている生活世界の意味は，私たちの心の働きである志向性（intentionality）が与えたものである。私たちが世界に見いだす意味は，実は自分の心が与えたものである。

フッサールの主張では，私たちの自我は，感覚データとした与えられたさまざまな現れを，“あるもの”として解釈し，意味づける（あるいは，解釈する）働きをする。この意味づけの働きが志向性と呼ばれる。私たちは，眼の前に現れた現象を，つねに「何か」として捉える。同じ摂氏三

八度の空気が，この南部の地域の気候に慣れた人にとってはそれほど暑いものではなく，またより寒い地域から来た私にとっては耐えがたく暑い空気として感じられる。私の心は，ある温度の空気に「酷く暑い」という意味を与えたのである。これは感覚的で身体的な気温の把握であるが，ここにはすでに，無意識的ではあるが一種の「解釈」と呼んでよい働きが存在している。あるいは，私の前にいる池の端でゆっくりうごいているものを，ただの「カメ」（の一種）として解釈するか，ワシントン条約で輸出が制限されている「テキサスチズガメ」として解釈するかによって異なった意味が与えられる。それに対する行動も異なってくる。フッサールの現象学とは，私たちが志向性を通してどのように世界を意味づけているかを分析しようとするものであった。

3. 意味と実存

しかし，こうしたフッサールの考え方，すなわち，自分の心が世界に意味を与えているという考え方は，後継の現象学者たちによって鋭く批判されていく。

たとえば，モーリス・メルロ＝ポンティは，世界に対して一方的に自分の側から意味を与える自我など存在しないと主張する。私たちの身体は，人類学や動物行動学が明らかにしているように，自分たちの先祖であるさまざまな動物と共通の特徴をもっている。人間の身体は，一定の環境と相互作用するように最初から生物学的に設計されている側面をもっている。あるいは，私たちの環境を解釈する仕方は社会的に与えられたものでもある。たとえば，私たちは部屋がまとまっていないと「汚い」とか「見苦しい」と感じる意味づけを，親や社会から教わり，それを身につける。そうした「感覚」は生まれつきのものではなく，幼少期に大人たちによって教え込まれたり，社会に順応したりするうちに無自覚的に獲得される。私たちの生活世界の意味の多くは，社会によって規定され，社会から与えられたに等しい。言語も同様である。私たちは環境をしばしば言語的に表現して意味づける。しかし，自分にだけしか意味がわからない言語などそもそも存在しない。言葉の意味も社会から与えられており，私たちが言語を介して環境を理解しているのだとすれば，それはその言語を使う社会に従って環境を理解しているということでもある。

フッサールの弟子で，現象学的社会学を創始したアルフレッド・シュッツは，生活世界を社会的世界として理解する。社会的世界とは，社会の伝統や文化などがもっているさまざまな類型によって文脈が与えられた世界である。私たちを取り囲む環境についての認識も，他者や自己自身についての認識も社会的な類型によって構造化されている。たとえば，私たちは，自分自身も他者も，社会的な役割や職業，立場に準じて理解しようとする。シュッツにとっての現象学の目的は，さまざまな人間が共同して形成する間主観的な意味を解明することである。

ヴィルヘルム・ディルタイに始まり，マルチン・ハイデガーやハンス・ゲオルグ・ガダマーに受け継がれる解釈学も，フッサールの人間経験の理解の仕方に疑問を呈する。解釈学によれば，人間の経験においては，そのすべての部分が相互に関連しあっており，私たちの経験とはこの全体性を生きることである。だが，自分の経験をただ生きるのではなく，それを「理解する」ときには，経験全体の関連性を明確にして意識化する必要がある。経験の理解とは，全体性という文脈を保持しながら，その全体に照らし合わせてそれぞれの部分を位置づけることである。

たとえば，私の持っている指輪が他人にとってはありきたりの品物であっても，私にとってそれが代え難い物であるのは，母親が大事にしていたものを形見として譲り受けたという文脈があ

るからである。その指輪はいわば時空間に広がった筒のような連続体であり，指輪の周囲には母親と家族をめぐるエピソードが張りめぐらされている。その指輪をありきたりの品として解釈するのは，その時空的連続体としての指輪を，商品評価という一切片によって現時点で切り出したときに生じてくる評価である。指輪は，私と母親の絆を象徴する大事な品である。私と母親との関係は，その指輪をめぐるエピソードを通じて明らかになってくるのだし，私にとってのその指輪の意味はもろもろのエピソードを通してはじめて明らかになる。私と母親の関係という「全体」は，指輪という「部分」が明確になることで理解され，指輪という「部分」の意味は，私と母親の関係という「全体」のなかではじめて理解される。

全体の理解は部分の理解に依存し，部分の理解は全体の理解に依存する。この全体と部分が相互に循環的に規定する関係を，解釈学的循環と呼ぶ。このような循環的な過程を通して，経験の全体的な構造を明らかにすることが解釈学の目的である。解釈学によれば，フッサールが主張するように，私たちの自我がそれぞれの部分を綜合して世界全体を構成するなどということはない。たとえば，私の眼の前にある文字が書かれた白い紙は，研究室，机や電話，その置き場所などとの関連性において一気に「伝言メモ」として意味が与えられる。研究室の机の上の見やすい場所に，やや周囲のものとの距離がありつつ，電話の近くに置かれた白い紙は，その配置から伝言メモとして意味づけられているのである。誰かがそのメモを置き，私に応答を促している。応答するにせよ，無視するにせよ，そこにはすでに意味が与えられているのである。

フッサールを批判する現象学者や解釈学者たちは，私たちの自我が世界に意味を与えるどころか，私たちは意味の与えられた世界に最初から投げ込まれていることを認識していた。フッサールの批判的な後者たちは，主観とか自我とか呼ばれる一般的で抽象的な「精神」を問題にするのではなく，一定の特徴を備えた身体を授かり，特定の人間関係の中に生まれ落ち，特定の社会と時代状況の中で生きていく具体的個人としての自己を問題とした。人間は具体的な場所と時間に拘束されながらも，その制約を超えて生きていく。彼らによれば現象学の研究対象とは，「人間」とか「主観」といった漠然たる一般者ではなく，固有名のついた“誰それ”という特定の人間存在のあり方である。こうした個々人の置かれている生活世界を解明しようとする立場を実存主義と呼ぶこともできるだろう。

4. 自然と意味

私はフッサールの現象学よりも，実存主義的な現象学や解釈学に理論的な優位を認めるものである。しかしながら，上記のような現象学や解釈学の考え方に対しても，私は二つの大きな疑問を感じている。

ひとつは，私たち一般が「意味」として捉えているのは，人間的な関連の中だけで与えられるものなのだろうかということである。

先ほどあげた指輪の例にせよ，伝言メモにせよ，人間関係や社会の中での関連である。目的や価値と呼ばれるものも，すべて人間社会の中で与えられるものなのだろうか。金銭に意味や価値があるのは，それが社会の中で何かと交換できるからである。学歴を得ることを目標とするのは，それが社会的に評価されるからであり，職業遂行上，得られた知識が有益だからである。犯罪が負の価値をもつのは，それが社会的な関係を壊してしまうからである。このいずれの場合にせよ，

意味は人間社会の関係の中で与えられる。意味はすべて人間とその社会の中で与えられるものなのだろうか。

いや，身体を維持するためのさまざまな物事は，社会的とはいえない価値をもつのではないかと反論があるだろう。食料は—身体を維持するという重要な目的に奉仕するし，薬物も健康を保つという価値をもっている。暖かい日だまりや新鮮な空気もそうである。これらは確かに社会的とはいえない意味や価値や目的をもっている。

しかし，こうした意味や価値や目的を生命維持のためのものである。とすると，私たちの求めている意味や価値は，生命維持のためのものと社会的なものの二つになってしまうのだろうか。ここで気づくべきは，自然，とくに野性的自然の領域がすっぽり意味の領域から抜け落ちてしまっていることである。意味のあるものは，生命維持か，人間社会の関係にかかわるものであって，そのいずれでもない自然という存在は，いかなる意味や価値にもかかわらないのであろうか。言い換えれば，自然は，人間の生命維持に奉仕し，人間同士の社会的関係を作り，維持発展させるための材料であればよいのだろうか。そうした考え方は，環境哲学の文脈ではシャロー・エコロジーと呼ばれる。シャロー・エコロジーによれば，自然環境は維持され—保全されなければならないが，それはあくまで人間が人間的価値を維持発展させるためである。現象学や解釈学の立場は，暗黙のうちにシャロー・エコロジーと通じている。こうした自然を手段化する考え方は正しいだろうか。

もうひとつ，現象学や解釈学に対して感じる疑問は，全体性から意味が与えられるという考え方である。たとえば，自分の作っている食料品が消費者の健康を損ねているという理由で，自分の仕事に意味を見いだせなくなったと嘆く人を考えてみよう。その人が携わっている生産工程はたしかにある食料品を作り出すために一部をなしており，生産工程としては意味がある。しかし，その製品が健康被害をもたらしている点で，その人は，自分の仕事も消費者に奉仕するという意味を失ったと考えた。言い換えれば，消費者の健康な食生活から自分の仕事が外れてしまったことの認識である。

しかし，有限な人間が究極的な全体の関連を知りうるはずがない。もし究極の全体を知らなければ意味や価値を与えられないのであれば，人間には決して意味も価値も与えられないだろう。フッサールが主張するような部分を集めて全体を構築するという考えは，やはりおかしい。なぜなら，何がどの部分になっているかを知らないかぎり私たちは全体を構成しえないからである。この点を指摘した点において，フッサールの批判者たちは正しかった。しかし，全体の優先性を主張するのであれば，そして，究極の全体が与えられないのであれば，どのような区切りをもって「全体」と呼ぶのであろうか。最初に論じたように，意味，目的，価値という概念は，ある事柄を終局点から位置づけようとする。その全体が与えられる終局点とは何であろうか。その終局点なるものは曖昧であり，最終的に私たちの存在が，あるいは宇宙の存在が無によって終わりとなるならば，全体とは何のことだろうか。

私たちの経験の構造を探ろうとすれば，どこかで経験の流れを中断させ，そこまでを全体としてまとめた上で，部分の意味を確定させることになるだろう。しかし，それは経験を停止させ，決定的な形で変質させてしまう。そこで，なおかつ私たちの経験に意味を与えようとすれば，客観的に表出され，間主観的に共有された枠組みを採用しなければならない。そうした枠組みとして働くのが，言語や身振り，習慣，礼儀作法，表現技術や芸術，歴史的知識などの社会的・文化的

な形式である。だが，私たちが意味や価値や目的にかかわる問い直しを行うのは，まさしく，この問主観的な形式の枠組みが機能しなくなっているときである。それまで習慣的に行ってきたことが，その目的に奉仕しなくなった。礼儀の仕方が相手に通じない。歴史的知識が共有されていないどころか，そもそもその歴史に関する解釈が異なる。こうしたときに，冒頭であげたような意味の問いが私たちに去来するのである。

5. 自然と旅の現象学

既存の共有された意味の枠組みや形式が無効となり，かつ，究極の全体性が与えられるはずもないとすれば，私たちの生とはどのようなものであるのだろうか。全体性が与えられることが決してなく，それまでの生活の枠組みや形式が通用しない生とは，どのようなものであろうか。そのひとつの形は旅であろう。人生を旅にたとえるのは月並みなことである。だが月並みであるほどに，それは，私たちにとってきわめて強い生の実感でもあるのだ。旅としての生は，しばしば哲学でも引き合いに出される比喩である。しかしながら，旅が哲学の中心テーマになってきたとも思われないし，旅の現象学という分野も見当たらない。

誰もが旅をするが，国境を超えて異国でパスポート審査を受けるときに尋ねられるいつもの質問は，この旅行がビジネスか，観光か，それとも家族に合流するためかというものである。旅はときに明確な目的をもっている。ビジネスのための出張がそうである。家族の合流するための旅行は，家という場所に戻ったり，作り出したりする目的をもっている。これらの目的をもった旅行においては，移動は手段以上のものではない。

しかし，私たちはしばしば観光という目的で旅をする。観光と旅とは切っても切り離せない関係にある。観光は通俗的なものとみなされやすいが，よく考えてみれば私たちの不思議な，しかし強い欲求に支えられた行いである。頻度の差こそあれ，ときに旅をしたくなることのない人間などほとんどいないであろう。どこの国においても観光はいまや重要な産業であり，作物を植えたり，家畜を育てたり，何かを製造したり，何かを販売したり，貨幣や株を流通させたりといったことよりも劣った産業なのではない。観光は人間の深い欲求と本質に根ざしている。

観光が写真やメディアでよく見かける風景を単に再確認するためのものであったら，あまり興味深いものではないだろう。私たちが旅をして，観光をするのは，本来は，見慣れない，意外で，驚きに満ち，予想しなかったものに出会うためである。もちろん，私たちは，帰るべき場所をもちながら旅行をする場合がほとんどである。自分が普段住んでいる日常的な世界に無事に帰れるように，旅に伴う危険性を私たちはできるだけ少なくしようとする。しかし，そこにはなお，一種の冒険とハプニング，偶然の出会いを求める気持ちが働いていることを否定する旅行者はいないだろう。野生的な環境で生きることはノマド的に生きることである。

旅を経て，帰ってきた故郷は，元の場所だというべきだろうか。それとも，旅は続いていて，故郷と呼ばれる場所は次の旅への停留地にすぎないのだろうか。注目すべきは，自然，とくに田園や里山のような人間の手が深く入った牧歌的な場所よりも，野性的な自然は，なによりも旅するための場所であることだ。野性的自然は，数多くの人間が定住するにはあまりに厳しい地理的・気候的条件のもとにある場所のことである。そこには，野生動物が生息している。野生は帰る場所ではなく，旅するしかない場所である。そこには，田園や里山のような人間の存在を記すもの

はない。野生的な環境で生きることはノマド的に生きることである。

自然のなかを旅行したものは，日記という表現形態で自分の経験と思考を綴ることが多い。旅行を表現するには，日付や場所を記して自分の経験を記述し，そのときに自分に去来する考えを記録する以外にない。起承転結を十分に考慮する時間と余裕は旅の中にはないし，資料や文献を必要とする論文など書けはしない。旅の最中に，終局地点から全体を意味づけるようなものを書くことは不可能である。そうした表現は旅のあり方と矛盾する。旅における出会いを何と表現すればよいだろう。予測できるものとの接触は出会いとはいえない。計算されたものの到来も出会いとはいえない。自然，偶然，旅，出会い，そしてそれらを記録する日記。これらが，私たちの生を，意味や価値や目的といったものから解き放してくれるものではないだろうか。私たちは野生の中の旅をテーマとすることで，意味や価値や目的の問題に裏側から迫ることができるのではないだろか。

自然，とくに野性的自然と旅をテーマとした思想と哲学をこれからめぐってみようと思う。

謝辞
定年ご退職のお祝いと感謝の気持ちを込めて，冨安敬二先生に拙稿を捧げます。

本研究は，以下の日本学術振興会科学研究費補助金の成果の一環である。
基盤研究（A）24242001「知のエコロジカル・ターン：人間的環境回復のための生態学的現象学」